

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：33905

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720061

研究課題名(和文) 中近世移行期における絵巻・絵入り本の製作と大名家を中心とする受容

研究課題名(英文) The Production of Illustrated Scrolls and Books from the 16th to the 17th Centuries and their Reception among Warrior Families

研究代表者

龍澤 彩 (RYUSAWA, Aya)

金城学院大学・文学部・准教授

研究者番号：00342676

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中世から近世にかけての作品調査と文献資料調査を行い、同時期における絵巻・絵本類の製作と受容について考察した。作品研究の一例としては、土佐派が手がけた冊子表紙絵の模本を紹介し、物語絵製作の一端について明らかにした。また、尾張徳川家伝来の「平家物語図扇面」などの調査を通じ、写本(肉筆による絵入本)と版本の両方が隆盛した17世紀における絵屋・絵草紙屋のイメージ流通について考察を行った。また、受容面では、現存作例と蔵帳や売立目録などの資料から、大名家で武士が活躍する物語の絵本類が求められていた状況が確認できた。これらの成果は、論文4点・学会発表3回・図書(共著)1点の形で発表した。

研究成果の概要(英文)：For this research topic, I investigated works and documents dating mainly from the 16th to the 17th centuries. My aim was to consider the production and reception of illustrated scrolls and books from this period of transition from medieval to early modern Japan. In one specific study, I introduced the covers of illustrated books involving the Tosa painters, illuminating one aspect of the book production process. In another study, through a survey of fan paintings of The Tale of Heike owned by the Owari Tokugawa family, I contemplate the circulation of images among painting ateliers of the 17th century, an age when such book copying and printing flourished. Through study of extant works, collection registers and sale accounts, I uncovered how major warrior families sought tales that featured samurai endeavors. My research resulted in four papers, three presentations at academic conferences, and one book (co-authored).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：日本美術史 絵巻・絵本 大名文化

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は従来より、特に源氏絵、或いは御伽草子絵巻を研究テーマとして、展覧会の企画運営や、研究成果を図録の形で刊行してきた(『源氏絵の製作と受容 - 中世を中心として』『絵画でつづる源氏物語 - 描き継がれた源氏絵の系譜』,徳川美術館,2005年・『絵で楽しむ日本むかし話 - お伽草子と絵本の世界』,同,2006年)。また、土佐派・狩野派・琳派の絵師の手による源氏絵および御伽草子絵巻、城殿の落款のある「咸陽宮絵巻」(個人蔵)その他の奈良絵本等の作品の調査を行ってきた。その過程で、中近世移行期における絵巻・絵入り本の、(1)内容の多様化(さまざまな物語の絵画化)(2)筆者(絵画表現)の多様化(御用絵師から無名の絵草子屋まで)(3)現存作例の多さに比して、享受者についての研究の不足という点を実感したことが、本研究の着想に至った経緯である。本研究に通じる問題意識に基づき、享受者が尾張徳川家であることが明らかな作品について、徳川美術館および名古屋市蓬左文庫所蔵本の調査と、蔵書目録の調査を遂行中であり、一部の成果を「大名家と絵本」(『お伽草子百花繚乱』笠間書院,2008年)、「尾張徳川家伝来「羅生門絵巻」について」(『金鯰叢書』36,2010年)の中で発表した。

2. 研究の目的

本研究では、日本の中近世移行期の絵巻・絵入り本の製作と受容をテーマとした。応仁の乱(1467)以降、いわゆる戦国時代を経て江戸幕府が成立する、15世紀後半から17世紀前半を中近世移行期ととらえ、絵巻・絵入り本のうち、物語を絵画化した作品を主な対象とし、この研究テーマを深めるために一部前後の時代も考察の対象とした。この時期の、特に絵草子屋が販売した絵巻・絵入り本は、従来の美術史研究では軽視される傾向があったが、それらは中世以前の「1点もの」の絵巻と、江戸時代中後期以降に量産される版本の絵入り本とをつなぐ、日本の出版史における過渡期の物語絵として重要な意味をもつ。徳川將軍家・御三家をはじめとする大名家で様々な絵巻・絵入り本が所蔵されていたことは夙に知られているが、従来の研究にはない観点として、本研究では、それらの絵本が新たな社会体制のもとで家格を形成する為に必要な「道具」としての機能を担い、その所有には、家系(家の歴史)の正統性を象徴する“神話”を、モノとして保持するという意味があったという視点を導入した。社会が大きく変容した時期に、誰がどのような物語を絵とともに享受したのかを明らかにすることにより、中近世移行期の絵巻・絵本の制作と受容のあり方の解明に寄与することを目的として研究を行った。

3. 研究の方法

作品研究と史料研究の両面を平行して進めた。作品研究は、従来の美術史で行われてきた個々の作品の調査と分析であり、中近世移行期に製作された作品と、比較のためにその前後の時代に製作された作品を対象とした。作品の実見を基本とし、調査が叶わなかった場合には画像資料を活用した。

史料研究は、特に大名絵巻コレクションの内容を知ることと、絵屋・絵草子屋の活動の実態を整理するために、大名家の蔵書目録や道具帳、近代の売立目録を活用して、情報収集・分析を中心に行った。

4. 研究成果

(1)平成23年度

根津美術館での「平家物語画冊」調査をふまえて、「徳川美術館蔵「平家物語図扇面」について」(『武家の文物と源氏物語絵』所収図書(1))を執筆、発表した。徳川美術館所蔵作品は詞書を伴わないが、根津美術館での調査により、60面の全てについて、どのようにテキストが絵画化されているかについての考察を行った。また、両作品を比較することによって、同一の粉本を用いて描かれたと考えられる扇面画が、さまざまな形態で販売されていた様子が伺え、17世紀前半の絵本の製作状況と享受について多角的な視点をもつことができた。

また、23年度は、国内では実見することのできない在米作品の調査を行った。メトロポリタン美術館で開催の「Storytelling in Japanese Art」展も見学し、東海岸を中心とする在米の絵巻・絵本を集中的に観覧した。許可が得られた調査先では写真撮影を行い、画像を蓄積することができた。コロンビア大学の「浦島太郎」の調査では、従来「西包禎翁様 為御進物以御使者 被進」と解されてきた(林晃平「所謂御伽草子「浦島太郎」の展開」近年における諸本研究とその行方をめぐり『苫小牧駒澤大学紀要』第24号、2011年12月)箱書が「西郷禎翁様 為御進物以御使者/被進」と読むべきであることを確認した。「禎翁」は18世紀前半の大名西郷忠英(1764年歿)を指し、本の制作年代は18世紀初頭か、あるいは17世紀後半ではないかとの知見が得られた。所有者がわかる奈良絵本の例は貴重で、大名家における受容を考える上でも重要な作例として位置づけられた。

そのほか、23年度は、年記のある作品(ニューヨーク公立図書館蔵「隅田川の草子」元和4年)をふくむ、中近世以降期の絵巻の様々なタイプを調査した。本年に実見した「隅田川の草子」や、「岩屋」「小敦盛」(いずれもニューヨーク公立図書館蔵)などの作品は、16世紀末から17世紀初頭にかけて製作された、絵と詞が渾然一体となった絵巻・

絵本であり、それらを含めた「画中詞をともなう絵巻の展開」という新たな研究テーマを得るに至った。

(2)平成 24 年度

春日大社所蔵「合貝」の調査を行った。現存する他の作例との比較研究により、貝の大きさや絵のバリエーション、歌絵との関わりなどの特色が、近世初頭の合貝の特徴を示していることを指摘した。合貝は絵本・絵入本の範疇からは外れる作例であったが、慶長六年という年記があることでも重要で、絵屋、絵師の活動の実態を知る上で興味深い作例である。合貝の絵は、南都絵所が手がけた可能性があり、筆致や絵具の用い方は、16世紀末から17世紀初頭にかけて制作された絵巻にも通じる性質をもつ。この時期の絵師が扱っていた「商品」の幅を知る上で参考となる作品として位置づけ、研究成果は論文として発表した(雑誌論文(3))。

また、大名家の絵巻コレクションを考える上で、権力者による絵巻製作、絵巻の所持という問題に取り組む必要があるとの判断から、「彦火々出見尊絵巻」に関する研究を行った。同絵巻は江戸時代に酒井家から徳川家光に献上されたという点においては本研究がテーマとする時代に合致し、かつ、原本は「伴大納言絵巻」「吉備大臣入唐絵詞」などと同様、後白河院の蓮華王院宝蔵の絵巻群の一つであったと考えられており、権力者による絵巻所持の一例でもある。同絵巻には異界および異界からもたらされる宝物(特別な力)の存在が描かれており、そうした物語を視覚的イメージとともに表した絵巻を所持することは、異界の力をも掌握するという象徴的な意味があるように思われる。その点で、大名家が所蔵した「酒呑童子絵巻」などにも共通する側面が見いだせる。この研究の成果は、学会で発表した(学会発表(2))。

大名家コレクションの研究に関しては、明治から昭和にかけての売立目録の調査に着手した。「平家物語」や「酒呑童子」などの絵画作品が散見され、大名家コレクションを考える一つの指標にできるとの手応えが得られた。

また、本年は源氏絵研究の一環として、源氏絵の系譜を述べるとともに、新出の「源氏物語冊子表紙絵模本」(東京国立博物館蔵)を紹介する口頭発表を行った(学会発表(4))。

(3)平成 25 年度

東京国立博物館が所蔵する「源氏物語冊子表紙絵模本」についての研究成果をまとめ、論文として刊行することができた(雑誌論文(3))。「源氏物語冊子表紙絵模本」(以下本模本と呼称)は、41図の源氏絵を収めており、外題および巻末の墨書から、延宝三年(1675)に住吉具慶の筆によって写されたものであるとわかる。また、巻中で「光信筆」と極められており、模本制作当時は原本の筆者とし

て土佐光信が想定されていた。本稿ではまず、本模本に収められている各図が、『源氏物語』の中のどの場面を描いているのかについて、現存作例および絵詞の記述を参照しつつ検討し、場面比定を試みた。図様を検討すると、41図のうち32図が冊子の表紙絵ないし裏表紙を写していると考えられ、残りの9図は構図の特徴から、原本は色紙であると考えられる。各図の分析の結果、室町時代に製作された色紙・扇面画との類似などから、冊子表紙絵と思われる図様の原本の作成は室町時代に遡り、筆者は土佐光信である可能性を指摘した。土佐光信筆の冊子表紙絵については、これまで、天理大学附属天理図書館蔵「絵合」・出光美術館蔵「藤裏葉」が、『倭錦』に記された五十四帖の冊子との関連が指摘されてきたが、本模本の原本がそれらに該当する可能性がある。また、冊子表紙絵と思われる図様について、表紙・裏表紙の組み合わせの復元案を提示した。上記の検討を通して、本模本は、現存作例に乏しい『源氏物語』冊子表紙絵に、どのような場面が描かれていたかを知る手がかりとなる貴重な史料であることが明らかとなった。「源氏物語冊子表紙絵模本」を研究したことにより、日本の絵画の中で「表」と「裏」をもつ媒体の特徴というテーマの着想を得て、論文としてまとめた(雑誌論文(4))。表と裏の両面に絵が描かれる媒体としては、大画面では屏風の例もあるが、特に扇絵と冊子表紙絵は小画面であるという点で共通点をもつ。室町時代の文献史料からも、扇の表と裏にそれぞれ絵を描いたことが記されており、源氏絵扇面の現存作例として、表と裏に連続するように詞書を書写し、表面には人物を、裏面には景物のみを描いた作品が知られている(九州国立博物館蔵「源氏物語図扇面」(「扇面画帖」所収))。これらの例からは、両面に絵を描いた扇面画の場合、物語の展開を示す「連続性」と、表と裏で異なる主題や意匠を組み合わせる「対照性」が意識されるケースが多いことが指摘できた。こうした特徴は、同様に裏表をもつ小画面絵画である冊子表紙絵にも共通しており、例えば「源氏物語 絵合」(天理大学附属天理図書館蔵)の場合は、表には紫の上に絵日記を見せている光源氏、裏には藤壺宮の御前での絵合後の光源氏の姿を描き、「私」と「公」を対照的に表している。同じように、「源氏物語冊子表紙絵模本」に見られる「東屋」の場面では、表に浮舟と匂宮、裏には浮舟と薫の姿を描き、物語の展開を連続的に表すとともに、二人の男性に翻弄される浮舟の姿を対照的に描いている。こうした例から、絵師が表と裏のある媒体の特徴を意識して場面選択を行っていたことが窺え、日本絵画史の中に機知に富んだ造形表現があったことを指摘した。

また、大名道具と絵本という観点からの研究成果のまとめとして、説話文学会(南山大学 平成 25 年 6 月 29 日)において「尾張徳

川家における絵巻・絵入本の受容について」と題して口頭発表を行った(学会発表(1))。徳川美術館所蔵品を中心として、17世紀前半期の現存作例の紹介のほか、蔵帳や売り立て目録を活用し、「武家の物語」の絵巻・絵入り本が象徴的な意味を持つ大名道具の一つとして受容されていた点について述べた。この内容を改訂増補し、論文にまとめた(雑誌論文(1))。寛文・延宝期を中心とする17世紀半ばから後半にかけての時期にあつては、未だ各大家の所領が流動的な面をもっており、物語絵についても家の正当性を示すような内容のものが蒐集されたと思われること、また、大家におけるそうした傾向が、奈良絵本・絵巻製作と版本刊行の隆盛の一背景となっていた可能性があることを指摘した。なお、このテーマについては、今後も科研費による研究「中近世移行期の大家における<文化としての武>の創成」(基盤研究C・研究代表者:中根千絵 愛知県立大学教授)に分担者として関わり、継続して調査研究を行っていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

(1)龍澤彩「大家の絵本享受と絵巻・絵入本制作の隆盛について」『説話文学研究』(査読無) 第49号(印刷中)平成26年

(2)龍澤彩「東京国立博物館蔵「源氏物語冊子表紙絵模本」について」『MUSEUM』(査読有) 第643号 25-50頁 東京国立博物館 平成25年

(3)龍澤彩「春日大社蔵「唐子遊図貝桶」および絵貝・歌貝について」『金鯨叢書 史学美術史論文集』第三十九輯(査読有) 49-63頁 徳川黎明会 平成25年

(4)龍澤彩「源氏絵の『表』と『裏』 扇面画と冊子表紙絵を中心に」『金城日本語日本文化』(査読無) 第八十九号 1-11頁 金城学院大学日本語日本文化学会 平成25年

〔学会発表〕(計 3 件)

(1)龍澤彩「尾張徳川家における絵巻・絵入本の受容について」説話文学学会 平成25年6月29日 南山大学

(2)龍澤彩「Mastering Visions of the Borderlands: Claiming Sovereignty through Myth」Association for Asian Studies 平成25年3月24日 Manchester Grand Hyatt (米国・San Diego)

(3)龍澤彩「源氏絵の諸相 「源氏物語冊子表紙絵模本」の紹介をかねて」日本語日本文化学会秋季大会 平成24年11月21日 金城学院大学

〔図書〕(計 1 件)

(1)高橋亨・久富木原玲・中根千絵編・龍澤彩ほか24名共著『武家の文物と源氏物語絵』(龍澤彩「徳川美術館蔵「平家物語図扇面」について」掲載72-106頁)翰林書房 平成24年3月15日

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

龍澤 彩 (RYUSAWA Aya)
金城学院大学文学部 准教授
研究者番号: 00342676

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: